

多彩な専門家と出会い、多角的な視点を磨くことで新たな発想も湧いてくる!

現代社会の諸問題の解決策を「デザイン」し、次世代のリーダー育成を目指すのが、この研究科。

実際にどのような学びが行われているのか、現役の院生にお話を伺った。

**仕事との両立がしやすく
良質の刺激が得られる環境**

看護師・保健師として、生活習慣病予防などに取り組んでいる清さん。なぜ大学院で学びたいと考えたのだろうか。

「職場は、どうしても医療関係者ばかりなので一定の視点になってしまいがちです。社会全体から看護・保健の領域を見ることで、別のアプローチ方法が生み出せるのではと考えました」

数ある大学院の中から、慶應義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科(以下SDM)を選んだのは、社会人の受け入れ体制が整っているのが大きかったという。

「看護・保健系を含めいろいろな大学院を検討しましたが、通学に不

便だったり講義が昼間だけだったりと、仕事と両立できないところが多かったんです。その点SDMは、平日夜間と土曜日の開講で社会人も通いやすく、eラーニング受講もできるのが魅力でした」

しかも、SDMはあらゆる分野の研究を行っている全国でも珍しい研究科だ。科学技術から情報・通信メディア、宇宙、経済、マーケティングまで、教員はもちろん、院生もその分野の専門家ばかりがそろそろ。清さんにとっては、彼らとの出会いも大きな刺激となっている。

「わからない分野でも補い合えるので、多面的な学びができます。講義は、もつと受け身で学ぶ人が多いという先入観があったのですが、積極的な人ばかりで最初は驚きました」

「わからぬ分野でも補い合えるので、多面的な学びができます。講義は、もつと受け身で学ぶ人が多いという先入観があったのですが、積極的な人ばかりで最初は驚きました」



慶應義塾大学大学院 システムデザイン・マネジメント研究科 修士課程 2年
清 奈帆美さん

大学ではターミナルケア(終末期看護)を研究。看護師・保健師としてキャリアを積み、現在は慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスの保健管理センターに勤務。



中野 冠(なかのまさる)教授
(株)豊田中央研究所出身で、専門分野は製造型企業のシステムとビジネスプロセスのデザイン。

それぞれ研究分野が違っても、社会のためになる新たなシステムを「デザイン」することを目標にする点で共通しているのがSDMの大きな特長。単なる調査研究を行うだけではないので、お互いの問題意識やスキルを生かすことができるのだ。

「ですから、食欲に学びたい人にはびつたりだと思いません。私も、最初は仕事との両立が大変かと思っていたのですが、全然辛くありません。もうひとつの人生を楽しんでいる感覚ですね」

**より深い視点を育て
仕事の質にも変化が**

現在、清さんは中野冠教授の「ビジネスエンジニアリング研究室」に所属し、「生活習慣病予防のための行動変容」を研究テーマとしている。生活習慣病の予防を、対象者がより効果的に行えるためのアプローチ方法を模索しているという。

「中野先生に教えていただいたことで印象的なのは、マクロとミク

ロの両方の視点でデータを分析するという点。全体を俯瞰しつつ、一人ひとりのデータの背景をきちんと追うことの大切さを教えていただきました」

そのとおりにデータ分析を行うと、今までいかに経験のみに頼っていたかがわかるという。

「たとえば、2000人以上のデータを分析すると、予想以上のバラつきが出るんです。年齢や男女置かれた環境の違いなど、細かい背景を見極めなければ一人ひとりに対して適切な保健指導ができないということも、改めて痛感しています」

学んだことは、仕事にも効果的にフィードバックされている。

「マクロとミクロの視点を持つことは、仕事に対する姿勢の変化にもつながりました。健康診断などの大きなプロジェクトを行うときも、リスク管理を意識するなど、今まで以上に主体的に考えるようになりました」

社会全体の健康に対する意識を変えるには、医療機関の意識変革も不可欠。そのため、将来は行政側へも積極的に働きかけていきたいと清さんは語る。厚生労働省の審議会の一員として活躍する清さんの姿を見るのも、遠い将来ではないかもしれない。